

## 詩時評

### 第41回

# いのちを懸命に 生きるということ

松本衆司

大阪・関西万博が四月十三日に始まって二ヶ月が経つ。きっと多くの人が楽しみにして連日入場しているのだろう。この万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するために八つのテーマ事業が設定されている、という。その崇高な理念とテーマの設定には、現代日本の叡智で生命研究の第一人者福岡伸一なども関わっている。だが、私は大坂に住みながら躊躇っている。へいのちを知る、いのちを育む、いのちを守る、いのちをつむぐ、いのちを抜げる、いのちを高める、いのちを磨く、いのちを響き合わせる。これらのテーマはまさに命の尊さを語り、賢明な人間社会の未来図を想像させもする。それなのだ。世界のあちこちに戦争や紛争があり、家や暮らしが破壊され、殺戮され、暴力に貧困に飢

餓に……あらゆる困難に、もがき苦しみながら懸命に生きている人々がいる。それこそが人類の、万国の喫緊の課題（テーマ）ではないか。世界の人々が集う良き時間が少しでもテーマに触れる学びをもたらし、十月の無事な閉幕を願おう。人工島は脆いだから。

伊藤芳博『パレスチナ・レポート』（ふたば工房）の二〇二五年六月発行の二刷を読む。謹呈カードに「昔書いたものですが、今でも生きているようです」と、伊藤さんの直筆のコメントが添えられてある。彼が二〇〇三年と四年、二度にわたるパレスチナ（ヨルダン川西岸地区）入域の折に経験し見聞した非常な現実や出来事、或いはパレスチナの人々との交流の日々の報告や文章が本文二段組七十頁余に収められている。「パレスチナ・レポートII（2004）」の（詩のことば）冒頭のイタリヤ人ジャーナリストで思想家のティツィアーノ・テルツァーニ（この年の七月、癌により死亡）の引用部分を引く。

だがが誤っていて、だれが正しいのかが問題ではない（略）そうではなくて、正しいのは自分だと思いきみ、まちがっていることとを決めた相手を殺してしまう者がでるとを、いま避けることが大切なのだ。イスラエル人とパレスチナ人、いったいどちら

がまちがっていて、どちらが正しい？ どちらでもなく、じつはその双方でもあるのだ。ものごとの観点を変えることが大切だ。人類をひとつにまとめるものを正しいとみなし、分断するあらゆるものを誤りとみなすべきなのだ。（『反戦の手紙』）

平和を願う尊い言葉だ。では、その心を実践する者は誰か？ 誰がこのイスラエル人とパレスチナ人の現実には終止符を打つのか？ 憲法に九条を持つ日本人の一人として、強く日本の働きを願う。

「イスラエル、ガザ攻撃」は、二〇〇八年十二月二十七日イスラエル空軍によるガザ全域に対する激しい爆撃を指す。その文章の中で伊藤芳博は書く。

（略）と、このように解説しながら、そんな政治的なことはどうでもいいのだ、とだんだん自分に腹が立ってきた。そんなこととは関係ない人々が、子どもたちが、殺され傷つけられているのだ。イスラエルもハマスもない。こんな形で人が殺されているはずがない。こんなふうにな人の人生が閉じられていはずがない。そんな当たり前のことが、世界では当たり前でないのだ。そして、大量虐殺が行われているのと同じ世界で、私たちはその事実を知らされず、

あるいは知っても自分の周辺のことだけに  
目を向けて生きている。

今日もニュースでは食糧の配給を求めるガ  
ザの人々のあり得ない惨状がレポートされて  
いた。遠く離れた彼の地で飢えに苦しみ、暮  
らしを奪われた人々がいるのだ。心より、世  
界の人々の目がガザを見つめるものであって  
ほしい、と願う。伊藤さんはこの文章をパレ  
スチナの詩人マフムード・ダルウィーシュの  
詩「だんだん世界が閉じてゆく」(訳・イル  
コモンズ)で閉じている。その詩を引く。

僕らが世界の果てにたどりついたとき／僕  
らはどこへ行けばよいのだろうか？／最後の  
空がついに尽き果てたとき／鳥たちはどこ  
を飛ばばよいのだろうか？／草木が最後の息  
を吐ききったとき／どこで眠りにつけばよ  
いのだろうか？／僕らはそのわずかな血で  
／僕らの名前を記すだろう／僕らはその翼  
をもぎとり／僕らの肉がうたう歌をききな  
がら／その命を終えるだろう／最後に残  
されたこの小道の上で／そう／ここでこ  
の土地で／僕らが流した血のうえに／ここ  
からもあそこからも／オリーブの樹がなる  
だろう

二〇〇八年八月に六十七歳で亡くなったこ

の詩人は渾身の思いを込めてこの詩を書いた  
はずだ。私たちは世界を閉じさせてはならな  
い。「オリーブの樹」と世界の子どもたちが  
ともに育ち、心の底から微笑むことのできる  
地球を育てて行かねばならない。

柴田三吉詩集『ひとつの夜とひとつの朝』  
(ジャンクシヨン・ハーベスト)を読む。  
題詩「ひとつの夜とひとつの朝」を引く。

夜がほどけ／朝が結ばれていく／ねむり  
は死の練習だというのが／うまれる練習でも  
あったね／夜はいくつもの夢を溶かし／  
はじまりの海の混沌へといざなう／ささ  
めく細胞となって／進化の長い時をくり返  
し／夜がほどけるころには胎児の姿勢で  
／夜具にくるまっている／まどかな闇が  
白みはじめ／一閃 まぶたを裂く光／ひ  
とつの夜と ひとつの朝ごとに／死と誕生  
の練習をくり返し／そのたびわたしは し  
わの増えた赤ん坊となっている／よろこ  
びと哀しみを得て／ひとを生きた一日の終  
わりに／また昼をほどき／夜を結んでいく

物や事に触れる暮らしの中で、ふと何かが  
心と呼ぶことがある。それは生の時空のどこ  
かに、否もつともっと遠くまで、呼ばれるが  
まま誘われる。そんな現実と非現実の世界の

往還をしてきた詩人の生を見つめる確かな手  
触りの詩集である。

玉木一兵詩集『生死断想——琉球ホモサピ  
エンス考』(コールサク社)を読む。戦時  
下の沖縄を生き抜く父、戦後の沖縄で勤務し  
た少年院や精神病院で知る沖縄の人々の屈辱  
と混乱の経験と精神性、そこから思考する  
「少数民族のトボス沖縄」から一部を引く。

北と南のクロスする時空 そこに／島嶼群  
沖繩 琉球弧の現前があったといえるこ  
の時空は／南北の海の架橋として 異種  
文化威力をもった／力と力が衝突する 緩  
衝地帯であった／地理的にも その宿命を  
担いつづけて来たのだ／モノとヒトは こ  
の十字路の渦中で練られ 鍛えられ 濾過  
され／錬金術にあって 今日ある沖繩民族  
の 固有の風貌と／魂の原形が 形づくら  
れてきたことは まちがいない／二十世  
紀末の現在 あらゆる価値観が揺らいでい  
るとき／この鳥々の連なりが 飛翔できる  
一羽の鳳凰の飛び立つ寸前の 姿に見えて  
くる そんなイメージで／かつてこの鳥々  
の連なりが 俯瞰されたことがあっただろ  
うか／今 人々は この地球上で生存しだ  
いくために 相対的な／価値の基軸を 自  
らのものとして堅持しなければならぬ／

：略：／凹凸の厳しい隆起サンゴ礁大地で黙って大気から／その水分をとり 岩を抱いて根を張る ガジュマルの生態に／民族の生存気球力を 投影し 心身の安定をはかり／その背景に広がる空と海を 心の喩として生きて来たのだ／第二次世界大戦の終焉の 未曾有の地上戦を掻い潜り／その蘇生のエネルギーを吐き出して この地に生きる術を講じて／いったのは 意識の古層に眠っていた そんな／少数民族の求心力だったのだ／（略）／今 将に 地球上の多様なマイノリティのコスモロジーと／その真価と美学と知恵が 地球規模の 等価的な情報の波濤に／ある固い楔をうつつ力になる時である 我が沖繩も／地球上の百万単位の 優れた少数民族の特異な集合体として／その内在律に従って 生きる方途を 探らなければならない／（略）

改めて沖繩の歴史の現実を見つめ直す契機となる詩集であった。その上で、あらゆるものが「クロスする時空」に沖繩があると実感する。我々が求めるのは、自然と人類の共存であり、未来永劫の平和である。玉木一兵はこの詩篇の最後を「沖繩は本来的に 少数民族のトポスであると思う（略）人類の新しい価値観を 発信する 時が来たのだ」と締めくくる。「架橋として」の沖繩の本来の力が

今こそ求められるべきである。

和田祐子詩集『キアゲハの帰還』（土曜美術社出版販売）を読む。「ある九月初めの日曜日のお昼」を引く。

つらい／悲しい／悔しい／つらい／悲しい／悔しい／つらい／悲しい／悔しい／あしんどい／しんどい／しんどいなあ／なんでこんなことになったんやろう／今日はまだだ／九月初めの日曜日のお昼／それでも／病気が見つかったからの日々の中で／幸せなことが多かっただけだから／辛かった記憶はまるで夢の中で／だから今のつらさもきっと／そのうち夢の中だ／／幸せな記憶ばかり残る／それだけ時間を大切にできたんだろうな／だから幸せな人生／わたしを可哀想だと思っひとは／わたしを幸せにしてくれたひとです

「脳下垂体腫瘍による顔面神経の圧迫、肝臓への転移、余命宣告、右目失明。……一日一日を辛うじて生き延びていく。…」苗村吉昭の帯文の一節である。如何ともし難い体の変調の苦しみの中で、そのギリギリの痛みの中で体が眩く、心が眩く、その声にこそ命の真実がある。それを書きとめることはとても尊く、そして勇氣ある詩人の行為である。

高橋郁男叙事詩『風信』（コールサック社）を読む。本文二七六頁、一頁二十五字詰、十八行二段組。足掛け十年書き続けた全三六篇の叙事詩が収められている。「十二 接続狂の時代」の最終章を引く。

酒場の名は「風紋」／終戦直後の大宰治の小説「メリイクリスマス」の／モデルとなった林聖子・店主は 三十三歳だった／太宰と親しかった作家や出版社員らをはじめとして／数多の職種の人々が入り来る／以来 星霜五十七年 店主は九十歳を迎え／「風紋」は今年の夏 惜しまれつつ店を閉じた／／いい酒場には いい詩にも似た作用がある／様々な柵に取りつかれた現実から／いつとき 人を浮揚させる／所属ポスト 肩書を／いつとき脱がせ 一個人に戻す／／歴史を刻んだ酒場は／昔風の大きな家の太い柱のようでもある／近づいて目を凝らせば その柱には／無数の小さなキズが見えてくる／これまで ここに来て去って行った／何千 何万という人々の／その時々背丈の印が刻まれている／付き合ひの長い酒場に赴くことは／自らのかつての背丈を見るという／厳肅な甘酸っぱさを味わうことでもあった／／いい酒の酔いは すぐさめる／／いい酒場の酔いは まだ

さめない

縦横無尽に古今東西の時代や社会の事件・関心事や人物を浮き彫りにするこの叙事詩に、読者はいつの間にか引き込まれていく。稀有な詩集である。新聞記者としての豊かな文筆の経験と学識と想像力が奏でる叙事詩はどこかリアリティを伴っている。そのような叙事詩群の中から、あえて右の詩の引用をした。この一冊を包めるような気がしたからだ。

遠野魔ほろ詩集『がらんどろの夢』（思潮社）を読む。「家のスケッチ」を引く。

まどろんでいる家／いちばんおしまいに去ったのは 誰／眠りのとば口でふと思う／ぬくもった畳がそっと息をつく／梁がきしみガラス戸が音をたてる／薄い日差しが縁側で丸くなっている／それからゆっくり伸びをして／黄ばんだ畳のうえ 足音を忍ばせて移ろってゆく／小さい鉢のなかで福寿草が目をはひらき／日差しゆくえを追う／部屋奥に形をなくしたいいくつもの影／薄く濃くかさなりあつたり はなれたり／輪郭を忘れたことの安堵 がらんどろの静けさ／わたしはまどろんでいる／柔らかな足裏で／家の眠りのなかにひっそりと忍びこむ

変わらぬ時の静かな営みのなか、「家」は今も佇んでいる。その「がらんどろの静けさ」の中に、限らない思い出を心に携えた「わたし」がいる。そうして、「まどろんでいる」残された「家」と「わたし」がひとつになる。切実な描写の一つひとつが美しい。

後藤光治詩集『抒情詩篇』（アピラ）二十二号・文彩堂出版）を読む。「記憶の杜」を引く。

咽頭痛で／ペンキ職人の甥っ子が死んだ／まだ五十一歳だった／その父も母もペンキ屋だった／父は大腸癌で 母は肺癌で早くに死んだ／何とも不運な一家ではないか！／一人遺った姉は 火葬場で／泣きながら 炬のスイッチを押した／五十一年間の記憶の詰まった頭蓋が焼けていく／頭蓋は灰となるが／記憶は燃えるものなのか？／そとに出て 見上げると／突き出た 赤いレンガの煙突が唸っていた／そして 僕は見た／僕は見たのだ！／解き放たれた記憶が／ドレミの白い帯となって／林の方へ揺蕩っていくのを／煙は 雨に叩かれ／林の土に沁み込んだ／そこから種子が芽吹き／樹となった／ゆえに樹木は 記憶かも知れぬ／林には 過ぎ去った者の記憶の

樹々がイっている／風が吹くと一斉に記憶が零れ／さやさと／人の吐息がする／根は 地下水脈と／戦ぐ葉は 星々と交信している／闇夜には 記憶の雫が葉先を離れ／羽虫のように昇っていくそれらが宙で 金となる／だから 星空は／あんなにも 美しいのだ／今宵 空から／記憶の欠片が 金粉のように降ってくる／ペンキ塗れの甥っ子よ／安らかに眠れ！／大好きだった父母の 記憶の杜の傍らで／生ききれなかったお前の／お伽噺を紡ぐがいい

あとがきで、詩人は次のように記す。「リズムが、詩表現の要諦の一つであることは間違いない。問題はそのことを重視するか否かにある。こと現代詩においては、軽視する傾向が強いように見受けられる。その結果、隠喩性、奇抜性、タブーへの切り込み等がクローズアップされ、詩を難解なものにしている。（略）詩の抒情性は、もっと見直されても良いのではないか、というのが私の考えである。そこに、すっかり大衆離れしてしまった詩の、復権の鍵があるように思えるからだ」——後藤光治の切実な思いを読み取る。私も言っておく。詩は感情の世界に根差している。故に、詩の源泉には抒情がある。沈黙も、叫びもまた命の仕種であり、抒情のありかではないか、と。